

十二月の予定

| | |
|--------|--------------|
| 12月17日 | 学期末考査 |
| 19日 | マラソン大会 |
| 21~23日 | Xの行事(父兄招待あり) |

中学

せんで、極くありふれた事の様ですが次の事項を着実に積みあげて行きたいと思いますので、皆さんの御理解と御協力をお願い致します。

異例の短時間総会

高等學校前生徒総会は、十一月十五日六時目より講堂において開かれた。この日は非常に準備が悪く、生徒が集合した時にはマイク、机等の用意も出来ておらず又、各役員が集まらないなど、開会前から非難のヤジが相当でいた。

体裁だけの議題

ます。麻田会長が開会を宣し、記念祭の後始末や学力試験で時間をくつため、総会を開くのが遅くなったことを陳申し、又会則に反して総会の一週間前に通告を出せなかつたことについて弁明した。次に執行委員会からの報告があつた。ついで記念祭の決算報告があり、これによると予算八万円で総売上高が十七万四千、支出が十一万五千円少して利益は五万五千円程度であつた。

四番目に中央委員会報告が何の質問もなく終了し、つぎに議題の討議に入つた。議題は、「なぜ生徒会活動は不活発か」というのであつて、非常に熱然としていたがほとんど討論らしいものは聞かれなかつた。主だったものでは「クラブに対する寄附を認めよ」「コーチがないのが活動にぶる隙因だ」「クラブが生徒会から浮き上つてゐる」「クラブ同士はもう結びつくべきだ」等の意見や又「こういう場所ですべき問題ではない」といふ意見などであつ

最後に補導部に對する、授業中に欠け、調べるのはやめてほしい等の要望が出され、だいたい一時

間という廣例の早さで総会は終了した。

顧問の先生方も、あまりのあつ

気なさに「つまらん。つまらん」の連聲であつた。我々に生徒会

の情熱がないのか、情熱がこつ

う結果を生んだのか。何しろ我

には生徒会の存在について考え

おす必要が出来てきたところであ

役員の協力を得て、ベストを尽くして、大過なく期間を過ぎてさしていただきました。

回想といつても、とりたててい程の事はありませんが、我々役員がたてましたプランを中心に考えていたのだと思います。

まず、クラブの納得のいく予算が実行され、又実行されつつこれは実行事です。この事は、以前からいわれているが仲々でまなかつたところですが、予算小委員会を請いてクラブの部長との話し合いで、一

定率という予算決定方式となつた事によつて解決されたと思ひます。しかし、それであつても、クラブ部長や部員の中には、納得のいく予算、ということを感じ違ひをされて、唯多ければ多い程と思はれておられる方がいた様です。これはよく考えていただきました。

その次には映画観賞の事、これには何度か何度も書いた事ですので省略させていただきます。又自転車車場もおつてできる予定たそつ

會員の態度が残念

清水勝男

川嶋裕司君が、執行委員長には、増田博壽君がそれぞれ互選により過半数を獲得して当選した。なお同委員長は別項のような重記を本紙に寄せた。

又後期の各委員は次のとおりである。

川嶋、増田両君に決定

中央執行委員長選舉

中学

| | | | |
|----------|----|-------|------|
| 村山 敏郎 | 三三 | 服部 昭 | 岡本 隆 |
| 天目 壽捷 | | 岡野 光博 | 畔野 谷 |
| 青山 俊楠 | 三〇 | 岩村 悦治 | 川口 工 |
| 執行委員会 | | 小林 実 | 関 隆 |
| 員長 増田 博喜 | 二A | 丹羽 幸司 | 関 隆 |
| 員長 加太 知邦 | 三A | 篠原 雅利 | 塩津 安 |
| 加地 則之 | 三A | 神元 允郎 | |
| 青谷 隆史 | 三A | 橋森 正哉 | 小池 隆 |
| 青谷 克彦 | 二〇 | 原田 建夫 | |
| 郡司 俊俊 | | 奥島 俊介 | |
| 寺田 英之 | | | |

着実にやるだけ

着実にやるだけ

川嶋中央委員長

| | | | |
|-------|----------|---|--|
| 中央委員会 | | 川嶋中央委員長 | |
| 委員長 | 川嶋 裕司 三B | 好むと好まざるにかかわらず 与えられた責任は全力を以て全 うしたい……と云う信念を僕は持 つております。今度意外にも中央 否かその構成する国民、社会 人の實によります様に。 僕はもう一度皆さん共に たいと思ひます。僕等に許さ | |
| 副委員長 | 斎藤登史雄 三A | | |
| 書記 | 谷垣 昌敬 三C | | |
| 書記 | 高木 和敬 三B | | |
| 會計 | 小城 修 三B | | |

記念祭をふり返って

高二A
西尾敏彦

或るくす屋が、道々何の利益に
もならない石ころばかりを拾つて
背負つたかこ入れながら歩いて
いた。これを見た男が「屬麗な奴
だ、そんな石はすてしまつたら
いいのに、捨てるのは他にいつば
いあるぞ。」と言つた。その男は
そのくす屋が自分達人間の姿であ
るなどと全く知らなかつたのだ。
笑人間は「照れ臭い」、「じや
ま臭い」、「損だ」、「人に餘口
を言われるかも知れない」といふ
様な石ころをいっぱい持つて人生
という道を歩いているのだ。そし
てあまりの重さに思ひ様に動けな
かつたり、大胆な行動をする事が
出来ないものである。人を笑う前に
我々こそそのかごをかづらほすべ
きである。人はあまりにも多くの
の不要な感情を持ちすぎ、不要と
知りながらどうしてもそれを捨て
てしまつてしまふのである。そ

んなものを持つてゐることを運命
と思ひながら不自然であると考へ
ないものである、そこで増々積極的
に積極的になつていくこととするの
である。世間を見渡すとたいとい
うのは重たいかごを背負ひ、それ
でもまた石を拾つてはかごを増々
重くし、自らの行動を阻しなが
ら又かいらす入つて来るものである
に氣がつく。

かきせつせと不
要な石ころは捨
て荷を軽くして
どんどんと価値
あるものを拾つては活動している
人がままある。時にはひどい言葉
を受けながらも彼等は自分の信念
をまげずに勇敢に活動し続けてい
るのである。彼等はいかに良民の策で
あるかを知っているのである。

からつぽになれるといつても、そ
れは驚心もみえぬ外見もない隔
塵や氣配、のよになれといふの
ではない。たとえからつぽになつ
ても、持つべき目的はしっかりと
持たねばならぬし、その目的を
達成した後には、より意義あるも
のが人つていなければならぬし
あきらまず入つて来るものである
なり。

高二 A 西尾 鈴

記念祭をふり返つて

今度の記念祭が成功はしたわけではな
い、期待されてゐたものではな
かつたのはこの点であると思つて。キ
タ樹が「やろろ」 という氣持
で進んでゐる人なのだから、
あり、「からつぽ」を以て押
進む人こそフアイトある人なのだから、
あれにつけても種々の準備や練習

も参加した多くの者は全くフアイト
ある人達であつたと思ふ。彼等は
自ら不要な石を捨て身を軽くして
動いたので、その結果きつと欲か
あるいは銀か知らないがそれぞれ
に素晴らしいものをあいたかに入
れたたろう。人一倍重たいかこを
背負つていた僕でさえ、しかたな
く動かされては
んのちよつぱり
捨てた石の後に
こんな考えを拾
い入れることが
出来たのである

人間はかならずからつばになら
なくてはならない。そして学生生
活に於いてからつばになる最も良
い機会が記念祭である。今まで持
っていた重たい石ころをぶちまけ
て自由に動きまわるのが記念祭で
ある。そここそフアイトなるもの
も湧いて来るたろうし。我々
はとらわれることなく青春の情熱
を燃え立たせることも出来るた
う。そつてなければ記念祭の意
味もなくなつてしまふ。そしてこ
の機会を逸失すならば「腰とこ
んな」はやつて来ないのだから、
我々は一生石をひろつてかつが
ねばならない。それはあの罵
詈の姿であり、それを笑つた一
團罵詈の姿なのである。

記念祭はとにかく終つた。す
でに我々学生生活の一思い出と
して過去のこゝになつてしまつた。
しかしそれが与えた「からつば
になる」という考えは、ともす
れば「石をもちがちな僕から今
までの石をもちがちな僕から今
までの僕へ」の大きな変化であ
るのである。

理論より実行

増田執行委員長



衣 笠

で、のど長いノミとして活躍して
たいと思っています。

衣 笠

▼新体育館が完成し、このほどバスケットのゴール、ピンポン台が設備せられたため、放課後は大

